

NORTHERN OWLS

北海道美術館学芸員研究協議会

VOL. 12

2001. 10

■発行
北海道美術館学芸員研究協議会
「NORTHERN OWLS」第12号
北海道美術館学芸員研究協議会
事務局／北海道立近代美術館内
札幌市中央区北1条西17丁目
TEL 011-644-6881
FAX 011-644-6885

【談輪】

斉藤 傑——美術館・博物館を生かすのは人 中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館・前館長

地方自治体が設置する道立・市町村立の美術館、博物館は多く存在する。これらは、公民館、図書館、文化会館などと共に、生涯学習の中心的な施設として重要性が日々増しているといえる。

しかし各自自治体は、これらの施設を設置はするが、それらが持っている役割や存在意義を十分に認識しているのか、疑問に感じることがある。これは行政だけでなく、一般的な社会認識でもいえることである。

日本の社会は、経済の発展に伴い社会構造そのものが大きく変化した。労働時間の短縮、家事労働の合理化、少子高齢化、過疎・過密と都市化など、変化によって多様な問題が生じている。このような変化の中で、近年、生涯学習の重要性が強く言われている。

この生涯学習を担っている施設も多様で、それぞれが個別な役割を持っている。今日まで社会教育の中心施設として位置付けられてきた公民館は、各種の講座を企画、開催し、サークル活動の場を提供してきた。文化会館やホールは、優れた芸術に接する機会を提供すると共に市民の発表の場として使用されている。また、図書館は、印刷物になった過去の情報を多く保存し、学習の素材として提供するなど、施設ごとに役割を担っている。

これらの施設とは違い、美術館や博物館は、過去の作品や資料を収集し、その調査研究をし、展示等を通して

教育する機関と位置付けられている。ほかの施設は、学習の機会を提供したり、図書を提供したりするけれども、そこで働く社会教育主事や公民館主事は企画者であり、図書館司書は図書館の専門職員ではあるけれども、直接、教育したりはしないのである。これに対して、美術館、博物館の学芸員は研究者であると共に、教育なのである。このことは当の学芸員も含めて十分に再認識する必要がある。

美術館や博物館は、教育機関であり、その活動を支えているのが学芸員である。教科書に基づいて学習をするどんな小さな学校にも複数の教員がいる。これに比べ非常に広い分野にわたる資料を対象にし、その収集・保存・研究・展示に関する多くの仕事をするにもかかわらず、ほとんどの館は1人か、2人の学芸員しかいない。また、多くの館は、経験のない古手の事務職員が館長になる。豊かな行政経験に基づいた管理意識が強く、また、館長が変わるごとに、考えに差があり、そのことが学芸員との溝を生み、チームワークを崩してしまう。美術館や博物館は、単なる行政施設ではない、学校に校長がいるように、知識を持った館長が必要である。美術館や博物館を生かすのは人であり、優れた人材を持ち、教育活動することこそが最も重要であり、その館の生命である。

NORTHERN OWLS VOL.12 INDEX

談輪／美術館・博物館を生かすのは人 斉藤 傑……………1

抄録／私が見た北海道の美術 栃内忠男……………2

資料／道内美術館での北海道関係展覧会……………5

研究ノート／メタセコイア果実－炭鉱人の肖像

トークセッション「炭鉱文化をみつめ21世紀の

町づくりへ」開催報告

源藤隆一……………6

研究ノート／羽田栄一と函館の商業美術

霜村紀子……………8

研究ノート／「中根邸の画家たち」展を開催して

その準備と終了までの顛末記

吉崎元章……………10

会員名簿・規約・役員……………12

私が見た北海道の美術

画家

枅内 忠男

多感な青春時代を、私は戦争の真っ只中で過ごしました。困苦欠乏に耐えざるを得なかった生活の中で、絵を描く者にとっては、更に画材不足という切実な事がありました。

筆を洗った油がどろどろになっても捨てられず、水と攪拌させて精製したものを使ったものです。絵の具も、白が買えなくなったり、有彩色は赤、青、黄の順で姿を消し、最後まで売られていたのは、茶系だけでした。キャンバスはスフ（ステープルファイバー）製のものが売りに出ていましたが、これもすぐに品切れです。キャンバスの更生方法なども、いろいろ教えてもらいましたが満足のいくものは出来ず、古い絵を潰して描く他はありませんでした。

道内唯一の公募展として親しまれてきた道展は、中島公園の農業館で開かれていましたが、大戦勃発の昭和16年から、㊤今井デパートに会場を移しました。この年の道展会場では力作が多く、中でも田辺三重松、山田義夫、国松登といった方々の作品は、異彩を放っておりました。展覧会は、新聞社の主催するものや、美術家たちのグループ展、それに黒百合会展などが、デパートの催場で開かれているくらいのものでした。本物の絵を観る機会は少なく、画集を観ることが、絵を観ることと思っていました。ところが、「画集は、見合写真を眺めているようなものだ」と、海老原喜之助から聞かされました。が、画集は手許から離すどころか、貧乏に飽くことなく、観ていたものです。美術書や美術雑誌などもあまりなく、古本屋で宝物でも見つける思いで、探し求めました。

戦中から戦後の6年間にわたり、年に一週間ずつ、札幌で独立美術洋画講習会が開かれました。私は、これを楽しみに、毎回出席し、野口弥太郎、海老原喜之助ほか十名あまりの講師によるもので、北海道の美術家にとっては、たいへん貴重な講習会だったと思われます。

昭和18年、東京で開かれた聖戦美術展が札幌のデパートでも開催され、多くの観覧者が入場いたしました。今日は、皆さんにこのとき購入しました戦争記録画の複製を観て頂こうと持って参りましたので、ここに貼らせていただきます。これは、藤田嗣治の「アッツ島玉砕の図」で2603年（昭和18年）という年号とサインが入っております。こちらは、中村研一の「コレヒドール」を描いた作品で、他に宮本三郎の「パーシバルの会見」、それに小磯良平、田中佐一郎といった五枚の複製も持っております。絵葉書になりましたのは、猪熊弦一郎、中山昶、栗原信など十枚余も、この時手に入れました。翌年の19年になって、北海道関係では菊地精二が「北鎮」、小川原脩が「アッツ島爆撃」を制作され、他にも何人かの方がたも、記録画を制作され



ております。

この会場には、精魂込めて描き上げた200号程もあろう大作が所せましとばかり陳列され、壮観なものでした。これらの作品を、戦争記録画として鑑賞するのではなく、戦争というテーマを超越した眼で観ていた私には、絵画としての力作に、感喜を覚えるものがありました。

終戦近くになって、東京の空襲は3月10日以降、日毎に激しさを増し、北海道出身の画家たちは、道内各地に疎開して参りました。画学生だった私も、このすさまじい空襲のため命がけで帰札して参りました。

昭和20年8月15日に戦争が終わりました。それは、連合軍に対する無条件降伏という形の敗戦でありました。荒廃した国土と極度の食糧難の混沌とした世相の中で、人はどう生きるか、必死でした。画家は画家として、どう生きたらよいのか、それには画家の団結しかないのだと思われたのでしょうか。戦争末期は、中央の美術展も中止されておりましたので、疎開中の画家は、何時になったら帰京できるのか、予想すら立たなかったのです。

こうした中で、疎開中の画家たちは、道展の主要会員等とで統合した美術展を、会員展のように開こうと企画したのです。これを北海道新聞社の事業として、全面的に協力して、12月早くも全道美術協会が誕生いたしました。翌年の6月に、会員と招待者によって創立展が開催されることになりました。

全道美術協会の仮事務所として、南八条西四丁目の川村邸に寄寓する三雲祥之助方に置かれ、創立展の総会の通知は、招待出品者の私の所にも郵送されて参りました。会合は、三雲祥之助、小川マリ夫妻の畳の部屋で行われました。が、交通事情の最も悪い時でしたので、集まったのは数名で、それも札幌在住の方たちだったかと思います。話の内容については、会員と招

待者で陳列を行ない、
 出品料として十円を納
 めることだけを憶えて
 おります。食べ物之余
 裕などはあるはずもな
 いのに、馬鈴薯が二箇
 ずつ皿に盛られており
 ました。

創立展は、昭和21年
6月1日から7日まで、
㊥の会場で、10号ぐら
いから50号までの56点
が、観やすく陳列され
ました。私は、戦時中
から描き続けていた

「冬」(防空頭布を破った少女) 50号を出品いたしました。

甦った平和の中で、戦後はじめての展覧会でしたので、大きな反響を呼ぶことになりました。戦時中から休眠状態だった道展に刺激を与えることになり、道展の若い美術家たちが結集し、道展の再建を図るきっかけとなったのです。全道展の創立に参加していた能勢眞美、繁野三郎、今田敬一は、道展復帰への要請に応え、全道展を去ることになりました。その後、新生道展として再出発します。が、日本画の何人かは道展を離れ、本間莞彩を中心とした北海道日本画協会が設立され、7月に創立展を開いています。8月には、北海道アンデパンダン美術連盟が結成されるなど、戦後の北海道の美術界は、自由な空気の中で、新たな創作活動をみせはじめました。

創立展終了の後に、全道美術協会の事務所は南一条東六丁目の松浦洋画材店に移転いたしました。この年、全道美術協会は審査制の公募美術団体展として出発し、北海道新聞社と共催のもと、第一回全道展が、(Ⓐ)今井デパートで、昭和21年11月18日から23日まで開催されました。

審査は、㊦のお好み食堂の前の郷土品陳列室の部屋で行なわれ、創立展に出品した私どもは、進行など作品運びを手伝ったものです。陳列は、道新から全道展担当者として大阪谷保夫が参加し、会員と出品者によって行ないました。黒い顎ひげを蓄えた国松登が「ご苦労さま、ご苦労さま」と笑顔で、片手を上げながら、途中から現れました。まだ、四十前の年齢でしたし、最年長の上野山清貢でさえ、五十半ばだったのです。作品の号数は平均20号程で大きくても50号程度で、94点が陳列されました。第一回展の目録は、ご覧の通り、この一枚に印刷されてい

第一回全道展出品規約

會 期 一九四六年一月二十九日 二十四日
 入 入 同年一月二日午前九時 午後四時まで展覽會場
 地方出品 展覽店裡で送る入出品目録・手帳料を協會事務所に送ること、この場
 合は出品目録にその旨記すること
 出品手帳料 一人 十圓
 出品 一人三圓以内、大體制限なし、(繪畫、彫刻、工藝)
 審査員 作品はすべて全會員の審査により入選作品のみを陳列する
 繪畫 朝倉力男、伊東圭一、池谷寅一、木崎壽三、伊藤信夫、岩
 崎修三、上野山清賢、外川一、小川原敏、菊池裕二、木田
 金次郎、國枝隆、野澤廣一、高橋北雄、田中忠雄、田邊三重
 松、金子盛正
 彫刻 田中澄生
 工藝 宮下貞一郎
 入選作品は手帳料と認めないものに全連美協會賞、市長賞、市長賞、北
 海道新聞社賞を贈る
 一月一日北海道新聞紙上及會場
 作品は開會の日とその翌日中に必ず搬出すること、その間に搬出されな
 い作品は本會で保管に處分す
 ④他の展覽會に發賣したなどの作品は出品することは出来ない
 ⑤出品品は額縁その他の陳列に適する装飾をなし美術に當應、價格、住所、
 氏名を明記すること
 ⑥買約の際はその一割を本會に納めること
 ⑦作品の保管は充分注意するが不慮の災害は責任を負はない
 ⑧作品は作者自身で搬回することは出来ない
 ⑨陳列については條列を申立てることは出来ない
 ⑩本協會の總會によつて新會員、會友の推薦をすることがある
 ⑪受賞者は翌年の展覽會には無審査で出品出来る

第1回全道展出品規約（昭和21年）

ます。

第一回全道展出品規約と開催の案内には、道展会員の朝倉力男の名前が載っているのには驚きました。これは、この度私の持っている資料からはじめて知ったからです。半世紀もの間、21名によって創立されたという全道展の小史にもない、新発見ということなのです。第四回全道展になって退会された木田金次郎と共に、全道展には一度も出品されておりませんでした。

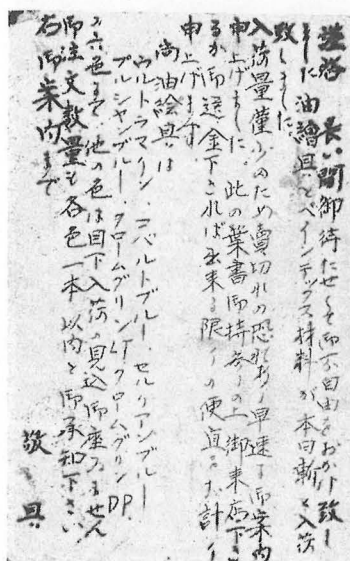
第一回全道展審査の直後、三雲祥之助と小川マリは帰京され、11月7日の消印の連名で、ご覧のように小さな五銭の官製はがきに十銭の切手の貼ってあるのが届きました。翌年には菊地精二と疎開中の会員の方がたが、相次いで帰京されております。全道展の審査には、東京から毎年数名の会員が出席されていましたが、中央との交流も盛んになり、中央の美術展への出品者



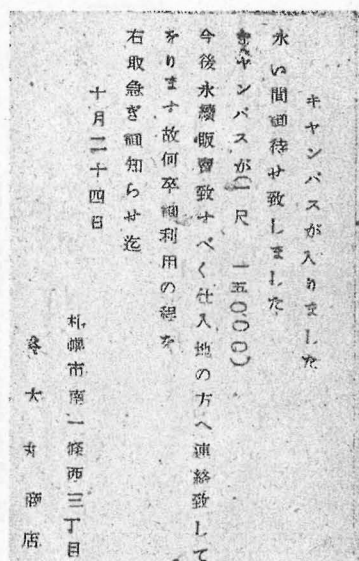
第2回全道展出品者懇親会集合写真（昭和22年）

「中根邸の画家たち」展を開催して

その準備と経過までの顛末記



大丸商店からの画材入荷案内はがき
(昭和21年10月11日消印)



大丸商店からの画材入荷案内はがき
(昭和22年10月27日消印)

も、急増するようになりました。

地域文化の向上にも連なる地方展が、第三回全道展終了後から函館をはじめとして、全道二十数箇所及び、第五十回まで続けられ、そのため地方から出品者も多くなりました。

昭和21年といえども、統制経済で食糧も着るものも、すべてが不足で、厳しい時代が続いておりました。この年の10月11日付の、ガリ版刷りの葉書は、大丸商店からの、画材入荷の知らせが届きました。戦後になってはじめて発売された絵の具は、青と緑でした。キャンバスは翌年の10月7日付で、一尺一五〇、〇〇と記されております。

昭和22年に大丸ギャラリーの開設披露として、日本現代水彩画展が、9月9日から13日まで開かれ、荻野康児、石井伯亭、石井鶴三、中西利雄、板倉賛治といった作品を観ることができました。

昭和26年には、日本画壇を刺激したサロン・ド・メ展が、札幌でも開かれました。この年に、東京ではアンリ・マチス展をはじめとして、翌年にはブラック展、ルオー展、ルーブル美術展、現代イタリア美術展と本格的な展覧会が年毎に続き、札幌からは、日帰りでも観られるという、いい時代になりました。昭和31年のアンフォルメルの出現は、若い芸術家たちに、大きな今日の前衛活動のきっかけとなったといえましょう。全道展にも、革新的な傾向の作品が多数搬入されるようになりました。

全道展の審査は、この前衛的な傾向の作品を受け入れている中で、田辺三重松の推奨する作品に賛否の活潑な意見が交わさ

れていました。すると「これが絵か、みんな、何を観ているんだ」と、生き生きとした言辞が、上野山清貢の口から飛び出たのです。優れた「自画像」を描き上げ、確固とした美術思想を貫いた画家は、後に「俺は、微の生えたような絵を描きたいのだ」と、呟くように言っておられた大先輩の言葉も耳に残っています。

社会に密着した活動として、企画した『美術映画と講演の夕』は、昭和30年から会期中に実施しております。講演は会員が担当し「フランス美術」「北斎」「近代フランス絵画史」などを上映。その後、講師を東京から今泉篤男、柳亮、嘉門安雄、三宅正太郎等の美術評論家を招き講演して頂きました。フランス留学から帰ったばかりの柳亮の講演の中で「フランスでは、抽象画家と具象画家とはつき合わない」「絵の中に、どれほどの愛情が有る絵かが問題にされる、それは技術上の問題では

はない」と、日本のアンフォルメル旋風時代に、試練を与えてくれた言葉だったかもしれません。

映画は、カラー映画で、マチスのデザインによる、黄色い無地の服を、マチスがモデルに着せるところからはじまるのです。イーゼルの反対側の椅子に腰かけたモデルを振り向きながら、筆を運ぶ、その眼の輝きと、マチス独特の制作過程をカメラが追う、魅力的なものでした。マイヨールは、モデル無しでデッサンするといわれていますが、その通り、ベランダーで腰を下ろす彼は、スケッチ・ブックを眺めながら、コンテを柔らかに使う場面は、あの豊かなフォルムを生み出した感性が伝わってくるような思いでした。ビュッフェの広い画室の真ん中に置かれた机には、さまざまなモチーフが乗っていて、その中に大きく切り取られた豚の頭部が、どんと置かれているのです。この頭部に、彼はナイフを差し込み、制作に取り組むのです。百号ほどの白いキャンバスは、見る見るうちに、完成に向かうという、直感の鋭い断面を観るような、興味深いものでした。

全道展の行事も含め、北海道の美術は、我が国の経済成長と共に、充実を見せるようになりました。

(文中、敬称は略させていただきます。)

*本稿は、平成12年3月3日の北海道美術館学芸員研究協議会での特別講話内容をもとに、新たに書き起こしたものです。

道内美術館での北海道関係展覧会

これまで北海道内の美術館で開催された北海道関係展覧会の状況を北海道美術館学芸員研究協議会会員のいる道内21館を対象に調査。各館の掲出資料を集約して掲載します。(平成12年3月調査)

平成12年3月に各美術館より提出された資料をもとに、それぞれの分類に当てはまる展覧会を開催年度順に、展覧会名(開催年度、開催館)と記した。
展覧会名のサブタイトルは省略した。
開催館は、下記のとおり略称で表記した。
網美…網走市立美術館、荒井美…荒井記念美術館、小川原美…小川原記念美術館、神田美…神田日勝記念館、木田美…木田金次郎美術館、銅AG…銅路市生涯学習センターアートギャラリー(現、銅路市立美術館)、芸森…芸路の森美術館、札幌美…札幌彫刻美術館、樽美…市立樽美美術館、函博…市立函館博物館、滝川…滝川市美術館、旭彫美…中標二館記念旭川市彫刻美術館、西村美…西村計雄記念美術館、北見…北網走北見文化センター、旭美…北海道立旭川美術館、帯美…北海道立帯広美術館、近美…北海道立近代美術館、銅芸…北海道立銅路芸術館、函美…北海道立函館美術館、三岸…北海道立三岸好太郎美術館、夕美…夕張市美術館

A 主に館のコレクションによって構成された展覧会

1. 作家、美術史の動向整理、回顧、展望

1. 個展 松前波響 アイヌ絵展(昭和48函博) 高森捷三回顧展(昭58樽美) 中村善策展(昭59樽美) 本郷新彫刻展(昭59札幌美) 中野五一展(昭61樽美) 一原有徳展(昭62樽美) 金子鶴亭60年の歩み展(昭62函美) 川端文学燦文集による金子鶴亭書展(平1函美) 上田桑鳩遺作展(平1滝川) 国松登の世界(平5近美) 高橋三加子の油彩画(平6旭美) 久本春雄展(平6銅AG) 個性の旅路一片岡球子(平7近美) 増田誠展(平7銅AG) 加藤順清展(平7旭彫美) 渡辺祐一郎展(平8樽美) 山内壮夫展(平8旭彫美) 羽生輝展(平8銅AG) 小林数展(平8銅AG) 柴田省三展(平8網美) 神田日勝展(平10近美) 山内壮夫素描展(平10旭彫美) 久本春雄・素描を中心として1・2(平11銅AG) 書家・上田桑鳩の世界(平11滝川) 西村計雄の世界(平11西村美)

2. 準個展 長谷川昇・小寺健吉・工藤三郎展(昭57樽美) 中原悌二郎と中原悌二郎賞の作家たち(平6,7,8,9,10,11旭彫美) 道南の美術IV・響きあう個性 田辺三重松・若船修三・橋本三郎(平10函美) 中原悌二郎とゆかりの作家たち(平11旭彫美)

3. グループ展 小樽の流れと現況(昭54樽美) 北海道の洋画家たち(昭60近美) 木之美・道北の美術(昭61,63旭美) 函館の絵画100年展(昭61函美) 昭和の北海道美術(平2近美) 旭川美術展(平2旭美) エコール・ド・パリと北海道の画家たち(平3近美) 朔北の画家たち(平4旭美) 道東の版画家たち(平5帯美) 北の美を彩るアーティスト(平5銅AG) 十勝の絵画・熱き表現者たち(平6帯美) 春がくるのだ(平7木田美) 北の光・北方ロマンの世界(平8近美) 道東の作家たち(平8帯美) 青の奔走BLUE(平8木田美) 吹雪の描線(平8木田美) 北見美術の流れ(平8北見) 北方の形象(平9近美) 永久の春(平9木田美) 海辺の画因(平9木田美) 雪彩の明暗(平9木田美) 色線の呼吸(平10木田美) 秋の色々の線(平10木田美) 函館美術館コレクション選(平11函美) 帯広美術館コレクション選(平11帯美) カンヴァスの陽光(平11木田美) 自然に挑む(平11木田美) 道東の美術家たち(平12帯美)

ロ. 地域の自然、歴史、文化をテーマ

1. 個展 なし
2. 準個展 北のトボス・4人の原風景(若橋英遠・神田日勝・木田金次郎・砂澤ビック)(平7近美)
3. グループ展 夕張を描く・移りゆく風景展(昭63夕美) 北の個性派(平3近美) 北のイメージ学(平4近美) 十勝を描く(平4帯美) 北の自然・心の風景(平6北見) 北の色彩・北の形象(平6旭美) 道東の美術―山と森と平原と(平7帯美) 人々・暮らし・風景(平7北見) 旅の絵「ツル・ド・北海道」(平9近美) 自然の中の画家たち(パルビゾン派/十勝)の美術(平9帯美) 銅路市所蔵作品展(平9銅AG) 巡る季節(平9北見) 北の大地・豊かなる水辺(平10北見) 北の木彫と風景画(平11芸森)

ハ. 現況紹介

1. 個展 なし
2. 準個展 なし
3. グループ展 彫りだされた木霊(平5芸森)

B 主に館以外の作品によって構成された展覧会

1. 作家、美術史の動向整理、回顧、展望

1. 個展 片岡球子富嶽展(昭47網美) 館外所蔵・居串佳一水彩・色紙展(昭50網美) 上野山清貢展(昭50網美) 館外所蔵・居串佳一油彩展(昭51網美) 神田日勝の世界(昭52近美) 若橋英遠展(昭53近美) 中村善策展(昭53近美) 片岡球子展(昭53近美) 木田金次郎展(昭54近美) 蠟崎波響展(昭54近美) 森田沙伊展(昭55近美) 高橋道雄遺作展(昭55網美) 上野山清貢展(昭56近美) 難波田龍起展(昭57旭美、近美) 佐藤忠良展(昭57近美) 三岸好太郎展(昭57旭美) 深井克美展(昭58近美) 佐藤忠良彫刻展(昭58網美) 田中忠雄展(昭59近美) 国松登展(昭60近美) 木内綾展(昭60網美) 久保守展(昭61近美) 秋山陽一展(昭61旭美) 菊川多賀展(昭62近美) 木村捷二展(昭62網美) 田中良展(昭62網美) 小川原脩展(昭63近美) 高橋北修展(平1旭美) 砂澤ビック展(平1旭美) 佐藤忠良の全て(平1函美) 国松明日香彫刻展(平1札幌美) 中景川弘道展(平1北見) 驚見憲治展(平1北見、網美) 梁川剛一さしえ展(平2芸森) 国松登展(平2樽美) 田辺三重松展(平3近美) 山口正城の世界(平3旭美) 深井克美・幻想の世界(平3函美) 本田明二展(平3芸森) 小谷博貞展(平3芸森) 松樹路人展(平3北見) 高橋利蔵・輝子展(平3夕美) 大江啓二展(平3網美) 矢柳剛の40年(平4帯美) 一木万寿三展(平4芸森) 三輪晃久写真展(平4銅AG) 山田義夫展(平4樽美) 北岡文雄の世界(平5近美) 深井克美展(平5旭美) 山沙走武彫刻展(平5函美) 橋内忠男展(平5芸森) 渡辺行夫彫刻展(平5札幌美) 寺島春雄展(平5日勝美) 丸木俊・丸木位里絵本原画展(平5滝川) おおはじ呂司とかがえり展(平5北見、平6滝川) 二部黎彫刻展(平5夕美) 砂澤ビック展(平6近美) 福井英人展(平6旭美、樽美) 寺崎広業展(平6函美) 栗谷川健一展(平6芸森) 菊川多賀展(平6銅AG) 藤根星洲展(平6夕美) 大崎盛写真展(平6夕美) 居串佳一展(平7近美、帯美) 朝倉力男展(平7旭美) 蛇子善悦展(平7函美) 鎌田俳捺子の世界(平7芸森) 国松登展(平7芸森) 藤野千鶴子展(平7夕美) 木村捷司展(平8函美) 能勢賢美展(平8帯美) 伊藤正展(平8芸森) 長倉洋海写真展(平8銅AG) 羽生輝展(平8銅AG) 片岡球子展(平8銅AG) 佐藤忠良・こどもの世界(平8旭彫美) 板津邦夫展(平8旭彫美) 回想・大黒孝儀展(平8夕美) 納直次展(平8網美) 松樹路人展(平9近美) 佐藤進展(平9旭美) 神田比呂子・彫刻の世界(平9旭美) 伏木光夫展(平9芸森) 砂田友治展(平9日勝美) 佐藤忠良素描展(平9旭彫美) 藤井忠行ワークス78-79(平9旭彫美) 江川博展(平9夕美) 彫刻

- 家山内壮夫のまなざし(平9夕美) 一原有徳・版の世界(平10近美) 菊地又男展(平10芸森) 中原悌二郎生誕110年記念展(平10旭彫美) 佐藤忠良展(平10夕美) 安藤文雄写真展(平10夕美) 松島正幸展(平11近美) 八木保次・伸子展(平11芸森)

2. 準個展 山口正城・健一智展(昭和59旭美) 函館のモダニスト・山本行雄と「アクション」の友人たち(昭63函美) 小熊秀雄・村山陽一・丹野利雄 夭折の画家たち旭川編(平4旭美) 金子鶴亭とその一門展(平4函美) 神田日勝と1960年代の画家たち(平5日勝美) 小熊秀雄と池袋モンパルナス展(平7樽美) 山下りんとその時代(平10函美) 中村善策とその人脈(平10樽美)

3. グループ展 蝶の夢・貝の幻(平1函美) 市民愛蔵絵画展(平2芸森) 北見黎明期の画家たち展(平2北見) 北見1940年代の画家たち展(平4北見) 日本画/道産子の巨匠たち(平5帯美) 北の日本画展(平8滝川) 写真渡来のころ(平9函美) 坂野守コレクション展(平9芸森、平10樽美) 北海道美術の青春期1925-1945(平11樽美、滝川) 大いなる地平から(平12銅芸) 中根邸の画家たち(平12芸森)

ロ. 地域の自然、歴史、文化をテーマ

1. 個展 田中良展(昭和62北見) 若橋英遠「1988富士を巡る」(昭和63滝川) 本間亮彰展(平8近美)

2. 準個展 北の円空・木喰展(昭62旭美、函美) 木田金次郎とその周辺展(平9滝川)

3. グループ展 赤レンガ庁舎の絵画展(昭58旭美) 浜のキッシュ(昭60近美) 北のハイカラ(昭63旭美) 蝦夷の風俗画(平4近美、旭美) 植物画の世界(平4滝川) 炭坑人の肖像(平11夕美) 美術はなにを記録してきたか(平12帯美) 北海道・港町浪漫(平12銅芸)

ハ. 現況紹介

1. 個展 中江紀洋(平6帯美) よしだつとむの軌跡(平7夕美) 岡沼淳一展(平11帯美) 伽丹丹陽展(平12帯美)
2. 準個展 小松清の世界/小樽の抽象絵画(平9樽美) 久保観堂・福岡幸一(平9北見) オホーツクのエッジ(平11北見)
3. グループ展 北海道現代美術展(昭52-56近美) イメージ北海道展(昭57-62近美、旭美、函美、61北見) 北ガラス工芸と彫刻の出会い展(昭57札幌美) 北海道・今日の美術(昭62平2,4,6,8近美、旭美、函美、帯美) 北の彫刻展(昭57,59,61,63平2,4,6,8,10札幌美) グリーンサイド展(昭59札幌美) オホーツク陶芸展(昭61網美) 北の創造者たち(平3,6,8,10,12芸森) 空知のこころ・工芸作家展(平4夕美) 北海道の現代木彫(平5旭美) 石川啄木と書の世界(平5函美) 銅路市民選抜展(平5,6,7,8,9,10,11) 新鋭作家4人展(平7北見) 現代版画4人展(平8網美) 具象画の現在(平9函美) 北の具象展(平9滝川) 夕張の画家3人展(平9夕美) 一の会展(平11夕美) 画家の目から見た我がまち展(平11滝川)

C 館コレクションと館外の混成による展覧会

1. 作家、美術史の動向整理、回顧、展望

1. 個展 工藤三郎展(昭55樽美) 中村善策を偲ぶ追悼展(昭58樽美) 大月源二展(昭58樽美) 渡辺祐一郎自選展(昭59樽美) 山内弥一郎展(昭60樽美) 宮川魏展(昭60樽美) 小松清展(昭60樽美) 若船修三展(昭62函美) 木村捷司展(昭62網美) 橋本三郎展(昭63函美) 斎藤清展(昭63樽美) 小品のあじわい―田辺三重松(平1函美) 小林政雄の夕張(平1夕美) 木下勘二追悼展(平2夕美) 田辺三重松展(平3函美) 畠山哲雄展(平3夕美) 増田誠展(平4銅路AG) 中村善策展(平5樽美) 池谷寅一展(平6函美) 木田金次郎美術館開館記念特別展(平6木田美) 若橋英遠展(平7滝川) 金子誠治展(平8樽美) 神田日勝の風景画(平9日勝美) 「室内風景」への軌跡(平10日勝美) 若橋英遠展(平11銅芸) 木田金次郎画業の変遷展(平11木田美) 小川原脩・その歩み(平11小川原美) 若橋英遠展(平11近美) 岡本一平展(平成11函博)

2. 準個展 珠玉の素描―田辺三重松/波響と函館の日本画(昭62函美) 木田金次郎と神田日勝(平1近美) 山崎省三と村山棟多展(平1樽美) 三箇二郎・木村訓丈・瀬戸英樹三人展(平2函美) 三岸好太郎と侯野第四郎(平3三岸美) 若橋英遠と片岡球子の世界(平4近美) 久本春雄と同時代の画家たち(平4銅AG) 三岸好太郎と札幌の画家たち(平6三岸美) 木田金次郎と神田日勝展(平9木田美、日勝美) 清水登之・居串佳一展(平9網美) 林竹治郎とその教え子たち(平10三岸美) 若橋英遠と一木万寿三(平10滝川) 三岸好太郎と北海道独立美術作家協会の画家たち(平11三岸美)

3. グループ展 道北の美術展(昭57,59,60,62平3旭美) 美術北海道100年展(昭62近美) 道東の美術展(平3帯美) 昭和の函館画壇(平4函美) 小樽・札幌青春の対話(平5近美) 道南の美術―戦前洋画の歩み(平5函美) 北海道の工芸(平7近美) 道南の美術―抽象の波(平7函美) 北海道の抽象絵画(平8旭美) 北の夭折画家たち(平8三岸美) 民芸の心をもとめて(平9樽美) 北海道美術・1960年代の動向(平11近美) 北海道美術の青春期1925-45(平11樽美、滝川)

ロ. 地域の自然、歴史、文化をテーマ

1. 個展 三岸好太郎の札幌風景(平1三岸美) 若橋英遠展(平2滝川) 一木万寿三一果樹園と人物と(平5滝川) 太陽の威力(平7木田美) モレアガル山展(平10木田美)

2. 準個展 北海道のなかの自然像(平成8旭美) 三岸好太郎と札幌を描いた画家たち(平9三岸美)

3. グループ展 北海道追憶(平6近美) 北海道はどう描かれてきたか(平10帯美) 風土への視線展(平10日勝美) 文化センターコレクション展(平11北見)

ハ. 現況紹介

1. 個展 なし
2. 準個展 本郷新の仲間たち展(昭59札幌美)
3. グループ展 なし

メタセコイアの果実－炭鉱人の肖像

トークセッション「炭鉱文化をみつめ21世紀の町づくりへ」開催報告

夕張市美術館学芸員

源藤 隆一

1. この取組の背景について

「黒ダイヤ」と呼ばれ、20世紀の主要エネルギーであり、生活の末端に至るまで幅広い需要を持った石炭。最盛期、道内には160鉱近い数の炭鉱が稼働し、なかでも空知管内において芦別から夕張に至る一帯は主要な産炭地帯として発展した歴史があります。

昨年開催したこの展覧会は1990年に夕張最後の炭鉱となった南大夕張鉱が閉山して10年目の年にあたります。この10年という歳月を振り返りますと夕張では、最も著しいのが人口の減少（1989年9月24,440人から1999年9月16,211人、減少率24.9%）でしょう。連動して高齢化がすすみ60歳を超える方が2000年3月で住民の43%、子供の減少による小中学校の閉校、統合といった事が上げられます。一方大まかな施策の面では観光都市を前面にアピールした国際映画祭やイベントの開催、合宿の里といった競技運動場や宿泊施設の整備が重点的に行われてきました。町は基幹産業の撤退の後遺症と再開発という2極のなかで大きく変化し、このことは少なからず他の炭鉱都市においても共通の現象であるといえます。

しかしここ数年来、空知支庁をはじめとして炭鉱の歴史を見直そうという気運が徐々に広がりを見せ、管内の都市にも再生塾といった市民の集まりが組織化され再調査が進められています。歌志内では資料保存会によって口述を郷土の民話として編集出版が行われ、建築物においては赤平、奔別、幌内、美唄などはシンボルといえるやぐら立坑が残されています。夕張では関連の建築物はこの10年間にも徐々に失われつつ、廃墟となりながらも骨格を残している物、また坑口のように意識してなめると未だ炭鉱地の面影を残す遺構として点在し、このような残された建築群は産業の遺産として、観光や歴史教育の素材とし

て価値を保存しようという運動も一部市民のなかにあります。

2. 構成と進行について

このような背景から、ともすれば失われつつあった炭鉱をいま一度振り返り、先に上げた60歳以上の年齢層の市民、おおくは炭鉱や関連する企業で働いていた人々ですが、彼等が生活のなかで養ってきた意識や考えを今一度あらわにしたいというのがこの取組の第1歩です。そして地域美術館のひとつの役割として、美術作品をとおして炭鉱を臨場感あるものとして提示し、広く理解をうながすためシリーズ化し繰り返されることを目的としたものです。

展覧会として、閉山後のこの10年に夕張において取材を行い、石炭産業に焦点を当てる5人の美術家に参加いただきました。作品は1994年に「顔－現代日本」というテーマで日本全土を撮影し、最後に夕張に入り、リタイアした炭鉱マンとその家族の肖像を撮影したジャック・デ・メロ氏、かつて実生活者として



小林政雄展示



ジャック・デ・メロ展示



岡部昌生展示



坂本順子展示



佐藤時啓展示

この町に暮らし、炭鉱勤めのかたわら文化運動の推進者として足跡を残す小林政雄氏。本来の役割を終えた炭鉱遺構や労働に従事した人々に着目し、自らの表現の一端として現代に提示する岡部昌生氏、坂本順子氏、佐藤時啓氏。いずれも炭鉱を進行形として捉えメッセージを発してきた人たちです。また若松由紀枝氏による舞踏パフォーマンス、記録映像の放映、そして6人のパネラーによるトークセッションを加え、住民参加型の複合的なプログラムにしました。会期中には岡部昌生氏の提案により作品のモチーフとなった木彫レリーフの制作者であるかつての小学生が23年ぶりの同窓会を会場で開催、「岡部さんの作品がなかったら、この子どもたちは会うことはなかった」という元担任教師の言葉は、この取組を有機的なものとした顕著な



若松由紀枝パフォーマンス

例としてあげることができます。展示室に入った人達は作品によって炭鉱生活のさまざまな思いが去来し、共有する意識が再確認されたとみてよいと思います。

3. 結果と今後の展望について

炭鉱は苛酷な近代初期の労働形態、災害、労使闘争、人権、公害などの未だ正確に把握されていない史実が数多く含まれた社会です。こと文化という側面については積極的な検証は未開拓といっているでしょう。「炭鉱文化なんて立派のものあったんだべか」。トークセッションは主題のフレームに少々とまどいながらも、展示作品とパフォーマンスに触発されて進められ、対話は広範囲に及びました。

炭鉱の生活文化は友子といった寄り合いによる鉱山特有の相互扶助組織、また教養、娯楽、味噌醤油の貸借に至る地域コミュニティに話が及び、常に死と向き合う労働と、反して生きることの喜びや連帯感の高揚というバランスの上にあり、人々が知恵を出し合い養ってきた文化であり、禁忌、迷信などと深く共存した精神文化をもっていた人々であったといえます。

しかし「少し裏側をみつめてほしい。たとえば朝鮮の人達の強制労働もありました。そういうものも含めて夕張の生活が成り立っていた。昔はよかったね、にぎやかだったよ。という言い方はやめてほしい。」という発言もあり、炭鉱の背面に隠された無形の文化というものが改めて参加者のなかで確認されました。

今後、この成果を美術家の表現によって「メタセコイアの果实」シリーズが、どのような展開をみせ、拡がりや深まりが得られるのか、地域の人々との連携のなかで、この取組を継続したいと思います。



観覧会場での旧夕張市立清陵小学校同窓会（右端岡部氏）

羽野栄一と函館の商業美術

市立函館博物館学芸員

霜村 紀子

当館では平成13年1月から4月にかけて、栗谷川健一、田辺三重松、羽野栄一の3人が原画を手がけた観光ポスターを中心に「北海道内観光地めぐり」と題したポスターや絵はがきで道内の観光地を紹介する展示を行いました。当館には羽野栄一がデザインを手がけたポスター「昭和33年「道立公園 利尻礼文」」、昭和33年「函館開港百年祭」、昭和35年「大沼国定公園」、昭和37年「富良野北の峰国民スキー場」—4点が収蔵されています。これらは制作当時配布され、当館に長年保存されていたもので、平成11年に改めて資料として登録しました。今回は、戦後の函館を舞台に活躍したグラフィック・デザイナー羽野栄一の活動をたどり紹介してみたいと思います。



修道女と農耕風景 昭和32年

羽野栄一は大正5年に富良野市生まれ、尋常小学校の頃から、絵を描くことが好きで、『少年倶楽部』に投稿し、入賞したこともあったようです。また、高等科の頃には独学ながら書道に打ち込み、書道の先生から高く評価され、春鶴という号を与えられます。中国の書を手本とし、毎日1000字以上書き続けたといいます。

昭和12年に百貨店の美術、看板などを手がける札幌六書堂に入社しますが、昭和13年に三越札幌支店の求人募集があり、応募者270名中の3名に選ばれ、装飾部に入社します。

羽野が函館に移り住んだのは昭和16年、北海道商業美術家協会の活動が停止し、太平洋戦争が勃発した年でもありました。羽野が描いたポスター第1作が北海道新聞社募集の「戦意昂揚ポスター」で1等に入選したのもこの頃です。羽野は病に倒れ



函館開港百年祭 昭和33年

た函館の友人から応援を求められ、3年間という約束で札幌から駆けつけ、丸井今井函館支店企画部に入社します。この頃の函館は書店にデザイン関係の書籍は皆無で、新聞広告のタイトルは木版を使用するなど技術的にもデザイン的にも遅れており、羽野は後に「ビジュアルの荒地であった」と語っています。

戦時中の活動は分かっていませんが、終戦後もない昭和22年、羽野栄一、東京から疎開してきた中川巖、児島善三郎門下の宮下広吉ら12名が集まり、「北方宣伝美術家集団」を結成します。栗谷川健一が創図社を結成したのが翌23年、札幌より一足早く活動を開始し、引き揚げ促進のポスター展、日米ポスター交換展などを開催していたようです。その後、この団体は「北方」を「北海道」と改称し、北海道宣伝美術家集団は『北海道年鑑昭和24年版』に「函館市内丸井内 宮下広吉」を代表として登場します。『昭和27年版函館道南人名録』には、東京に戻ったのか中川巖の名は見られませんが、宮下広吉、角谷隆一、羽野栄一、北海道新聞社の三方鉄男と成沢光男、ハコー印刷の小番大治と中山清、旭中学校の上山雲照と8名の会員が確認できます。会員をみていくと、角谷は赤光社会員であり、三方、小番は昭和37年7月9日付「北海道新聞」によれば、戦前の北海道商業美術家集団のメンバーであったといいます。宮下は戦前は第一美術協会にも出品していますが、昭和22年には独立美術協会会友として制作活動を行う一方、『昭和24年版函館商工名鑑』に「時事通信社内 北海道移動展協会」の代表者として記され、昭和23年に青函連絡船や駅の広告や宣伝美術全般を取り

「中野実の寒窓式」を興し開き

手前が山頂の風景を写した雪の山

手前が山頂の風景を写した雪の山

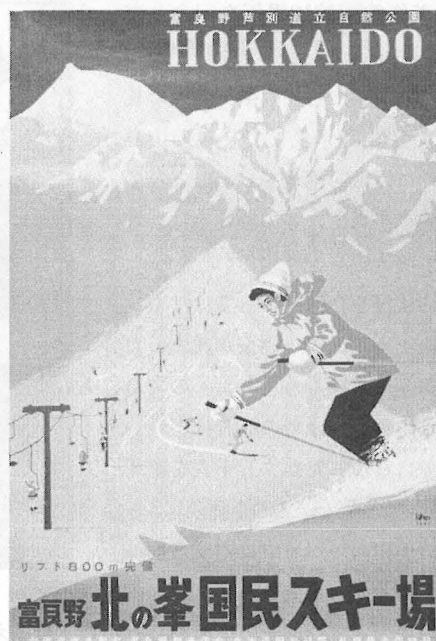
手前が山頂の風景を写した雪の山

扱う会社を興し、『昭和29年版函館商工名鑑』から「宮下宣伝社」と改称していることがわかります。

昭和26年、日本宣伝美術会が各企業の有力デザイナー約50名によって、まず東京地区で結成されます。次いで大阪、名古屋、九州地区と全国的に広がり、翌27年には日宣美北海道地区が創図社の会員を中心に結成され、後に小樽、函館からも会員が加わっていきます。日宣美は毎年全国主要都市で展覧会を開催するほか、対外交流、シンポジウムなどの活動を行い、とくに公募形式の展覧会は新人の登竜門となり、次第に権威化されていきます。昭和45年に解散するまで、グラフィック・デザイナーの職能団体としてデザイナーの社会的地位を確立するために大きな役割を果たしました。

北海道宣伝美術家集団は、やがて「日宣美函館連絡所」になっていくといいます。時期を前後して、昭和28年には「函館宣伝美術会」が結成されます。『1955年版函館道南人名録』をみると、日本宣伝美術会函館支部は会長を羽野栄一とし、会員に鍋島金一、成沢光男、阿部立、小番大治、青木時男、角谷隆一、三方鉄男、斉藤三郎、斉藤喜久雄がおり、函館宣伝美術会は丸井今井企画部内に事務局がおかれ、羽野栄一、角谷隆一、中山清、阿部立、金田喜造、青木時男の6名が委員となっています。羽野は2つの団体の代表として、函館の商業美術界の中心的存在であることがわかります。函宣美は新聞記事によれば、30名前後の会員を有し、年1回の展覧会では小中学、高校生のポスター公募展などもあわせて行っています。当初は日宣美と函宣美とも羽野、角谷、阿部、青木ら中心的会員を同じくしていますが、次第に函宣美は若手の会員を中心とした団体になっていくようです。昭和30年代の函館では、2つの団体がそれぞれ展覧会を開催し、活動を続けていきます。

昭和30年、羽野はフリーランスデザイナーとして独立し、函館、江差、大沼公園など道南の観光ポスターを一手に引き受け、精力的に制作活動を行います。昭和37年には独立後の作品を一堂に会した個展を函館棒二森屋で開催します。函館で初めての商業美術の個展として話題になりました。図録『羽野栄一のデザイン』には栗谷川健一から「"はこだて"の羽野さんをたたえる」という文章が寄せられています。二人は25年来のつきあいで、このとき羽野は北海道地区委員、栗谷川は日宣美中央委員であり、戦前の4年間を過ごした函館で責任者として会を率いる羽野の功績を特別な思いで讃えています。函館市の観光ポスターは第1作が栗谷川の「修道女と市街地」に始まり、第2作、第3作が羽野作品と、函館の商業美術史を映しているかのようでもあります。昭和32年の函館市観光ポスターは色紙をちぎっ



富良野北の峰国民スキー場 昭和37年

て作ったはり絵で、後に羽野が一番思い出に残る作品と語っています。

昭和45年に日本宣伝美術会が解散すると、函館支部の会員は「函館デザイナー・グループ」を結成し、後に「函館デザイン協会」と改称しますが、会員の離合集散など紆余曲折のなか、羽野はデザイン協会の初代会長として会をとりまとめました。

羽野は昭和40年には函館デザイン研究所を設立し、若手の育成と職業としてのデザインを社会的に向上させることに力を注いでいくようになります。また、昭和47年には函館大学で商業美術論の講師も務め、昭和50年には函館市文化団体連絡協議会の会長に就任します。

これらの功績が認められ、昭和56年には函館市文化賞芸術部門を受賞しています。

晩年にはデザインではなく純粋絵画として油彩に取り組み、病に倒れてからも油彩の個展開催にむけて意欲的に制作を続けます。平成2年5月、羽野栄一は74歳の生涯を終えます。同年9月には友人らの手で油彩の遺作展が開催されました。

まだ調査を始めたばかりですが、函館デザイン研究所で学んだ方からご子息の羽野栄氏をご紹介いただき、参考資料を提供していただきました。ここに記してお礼申し上げます。今後は関係者の方々に話をうかがい、原画や遺品にあたりながら、羽野栄一を中心とした戦後の函館の商業美術活動について調査を進めて行きたいと思います。

「中根邸の画家たち」展を開催して

その準備と終了までの顛末記

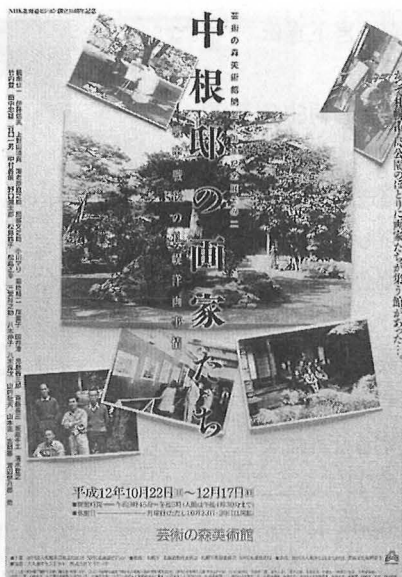
芸術の森美術館学芸員

吉崎 元章

芸術の森美術館開館10周年を記念して2000年10月22日から12月17日の会期で開催した「中根邸の画家たち～戦中・戦後の札幌洋画事情」。昭和20年代まで札幌の中島公園のほとりに屋敷を構えていたひとりのパトロンに焦点を当てたこの展覧会は、埋もれた札幌の美術史を掘り起こすとともに、当時の美術の状況を、作家からではなく、作家の活動を支えた人物と画家が集まった場所という角度から探ろうとしたものである。晩秋から初冬にかけてのそれほどいい季節の会期ではなかったが、五千人を超える観覧者を数えたことは、この企画のユニークさと地元の美術の一ページに対する興味と関心の高さを示すものであろう。

地方美術館にとって、地元の美術をしっかりと見据え、位置付けていくことが重要な活動であることはいまさら断るまでもないが、芸術の森美術館では、開館以来札幌にゆかりの深い画家の回顧展を毎年開催するとともに、「北の創造者たち展」をおよそ隔年で開催し、北海道在住の若手を中心とした美術を紹介してきた。しかし、この「中根邸の画家たち」展は、その発想から調査、そして開催してからにおいても、これまで経験してきた展覧会とは異なる点が多く、ここで報告したい。

まず、中根光一と中根邸について簡単に紹介したい。1937年、服部紙店札幌支店支配人を務めた父から若くして巨額の財産を相続した中根光一は、戦中戦後の極度の物資不足の時代に、多くの画家を家に招き、食事や酒を振る舞い、制作の援助を続けた。海老原喜之助、児島善三郎、野口彌太郎、三雲祥之助、菊地精二、田中忠雄、松島正幸をはじめ、中央の第一線で活躍する画家たちが彼を頼り避暑や疎開のため中根邸を頻繁に訪れている。また、札幌を訪れた芸術家が必ずといっていいほど立ち寄り場所でもあったらしく、その他多くの芸術家が敷居を跨いだことであろう。日々画家たちが集い、一種のサロンの役割も呈し、戦後にはそうした集まりのなかから、新しい美術展をつくる動きが起り、全道美術協会（全道展）の創立につながるひとつのきっかけともなっている。さらに中根は、1940年から1949年の間に6回開かれた独立美術協会夏期洋画講習会の札幌開催を支援するとともに、終戦間もない頃に邸宅の居間で疎開画家を講師とする「札幌洋画研究所」を開くなど、画家を志す札幌の若者に中央画壇の息吹を伝えることにも尽力した。しかし、本業の事業失敗も重なり、中根はパトロンとして財を使い



果たし、1954年に東京に引き揚げていった。

そうした中根光一の功績と中根邸が札幌の美術に果たした役割を91点の作品と写真資料によって三部構成で紹介しようとしたのがこの展覧会である。第一部「中根邸の画家たち」では、中根邸に出入りしていた18人の画家たちが札幌で描いた作品を作家別に展示。第二部の「旧中根コレクション」では、当時の日本の主だった洋画家を網羅しその数200とも300点とも言われた所蔵作品のうち所在が判明した16点の作品を、戦前に市内のデパートで開催した2回の所蔵品展の資料とともに展示した。第三部「札幌洋画研究所」では、1946年から中根邸で開かれた絵画研究所に通った画家たちの当

時の作品とともに、それぞれが自らの作風を確立してからの作品を展示することによって、札幌のその後の美術に与えた影響を見せようとした。

■展覧会のきっかけ

この企画は、これまで「札幌の画家シリーズ」と称して行ってきた札幌にゆかりの深い画家たちの回顧展の調査のなかで抱いたひとつの疑問が出発点になっている。これまで芸術の森美術館では、小谷博貞、一木万寿三、栃内忠男、栗谷川健一、鎌田俳捺子、国松登、伊藤正、伏木田光夫、菊地又男、八木保次、八木伸子らの画業を綴ってきたが、各々の作家の足跡をたどりながらも札幌の美術の動きを垣間見ることができたものでもあった。なかでも、一木万寿三、国松登、伊藤正を除いて、その調査時に現役で活躍する作家から直接多くの話を聞くことができたことは、何ものにも代えがたい貴重なものであった。

はじめて中根邸について興味をもったのは6年ほど前のこと、栃内忠男から「札幌洋画研究所」のことを聞いたのが初めてだったと記憶している。その後、菊地又男展や八木保次・伸子展の準備段階にも作家の口から幾度となく出てくる中根邸の話。菊地又男は兄精二とのつながりから画家たちが集まる中根邸に何度も行ったことがあると言い、八木伸子は若いときに中根邸で絵を学んだという。しかし、手許にあるいくつかの文献に当たってみても中根邸について書かれたものは極めて少なく、どれも断片的で全体像が把握できない。今田敬一著『北海道美術史』（北海道立美術館、1970年発行）では、巻末の「北海道美術史余話」で「中根コレクション」という一項目を設けたなかに僅か数行で所蔵作品や所蔵品展について触れ、本編では全道展創

11

北海道美術館学芸員研究協議会会員名簿・規約・役員

■北海道美術館学芸員研究協議会会員名簿

平成13年3月31日現在（50音順）

浅川 真紀 北海道立旭川美術館学芸員
浅川 泰 北海道立近代美術館学芸第二課長
石尾乃里子 北海道立帯広美術館学芸員
井内佳津恵 北海道立近代美術館学芸員
五十嵐聡美 北海道立近代美術館学芸員
井上みどり 札幌彫刻美術館学芸員
居林 洋子 滝川市美術自然史館副館長
岩崎 直人 芸術の森美術館学芸員
上木 和正 夕張市美術館館長兼事務長
大下 智一 北海道立近代美術館学芸員
岡部 卓 木田金次郎美術館学芸員
奥岡 茂雄 北海道立近代美術館学芸副館長
小沢 資子 荒井記念美術館学芸員
角井千代絵 釧路市立美術館学芸員
釜沢 恵子 鹿追町立神田日勝美術館学芸員
鎌田 享 北海道立帯広美術館学芸員
久米 淳之 北海道立近代美術館学芸員
源藤 隆一 夕張市美術館学芸員
河野 敏昭 滝川市教育委員会社会教育部文化課芸術文化係長
古道谷朝生 網走市立美術館学芸員
斎藤 傑 中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館館長
斎藤 知子 北網圏北見文化センター学芸員
斎藤真理子 中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館学芸員
笹野 尚明 芸術の森美術館館長
佐藤 友哉 北海道立近代美術館学芸第一課長
佐藤 幸宏 北海道立近代美術館主任学芸員
佐藤由美加 北海道立三好好太郎美術館学芸員
柴 勤 北海道立函館美術館学芸課長
霜村 紀子 市立函館博物館学芸員
新明 英仁 北海道立旭川美術館学芸課長
菅 訓章 神田日勝記念館館長代理
鈴木 正實 北海道立近代美術館学芸部長
瀬戸 厚志 釧路市立美術館学芸員
平 利弘 北海道立旭川美術館学芸員
地家 光二 北海道立釧路芸術館学芸課長
寺嶋 弘道 北海道立帯広美術館学芸課長
土岐美由紀 北海道立近代美術館学芸員
苦名 直子 北海道立近代美術館学芸員
苦名 真 北海道立三好好太郎美術館主任学芸員
中村 聖司 北海道立近代美術館学芸員
南部亜矢子 西村計雄記念美術館学芸員
萩原千鶴子 北海道立函館美術館学芸員
福士 理 芸術の森美術館学芸員
福地 大輔 北海道立釧路芸術館学芸員
星田 七重 市立小樽美術館学芸員
穂積 利明 北海道立函館美術館学芸員
水田 順子 北海道立近代美術館主任学芸員
光岡 幸治 北海道立近代美術館学芸員
村山 史歩 北海道立釧路芸術館学芸員
八代 彰子 芸術の森美術館学芸員
矢吹 俊男 小川原脩記念美術館館長
吉崎 元章 芸術の森美術館学芸普及係長
吉田 豪介 市立小樽美術館館長

（計 50名）

■北海道美術館学芸員研究協議会規約

- ◆第1条（名称）
本会は北海道美術館学芸員研究協議会（略称・道美学芸研）と称する。
- ◆第2条（目的）
本会は博物館学、美学、美術史等についての研究、協議を行なうとともに会員相互の連携、情報交換を図り、北海道の美術館等学芸員並びに学芸業務に従事するものの資質の向上、および各館の活動の充実に資することを目的とする。
- ◆第3条（事業）
本会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。
1. 研究会の開催
2. 会報の発行
3. 研究協議内容の収録
4. その他必要な事業
- ◆第4条（会員）
本会は北海道の美術館等学芸員並びに学芸業務に従事するものによって組織される。
- ◆第5条（事務局）
本会の事務局は道立近代美術館学芸部に置く。
- ◆第6条（役員）
本会の役員は下記のとおりとする。
顧問 館長職（非常勤）にあるもの。
会長（1名） 道立近代美術館より選出。
副会長 総会で必要と認められた会員。
幹事長（1名） 道立近代美術館より選出。
幹事（8名） 道立近代美術館より4名、他の道立美術館より2名、道立美術館以外の美術館より2名を選出。
会計（2名） 道立近代美術館の幹事より選出。
監査（2名） 他の役員以外の会員から選出
※役員の任期は2年とする。但し再選は妨げない。また欠員が出た場合、当該美術館から補い任期満了まで務める。
- ◆第7条（会議）
本会の会議は、総会及び役員会とする。
1. 総会は毎年1回開き、次の事項を協議し、これを決定する。
(1) 予算及び決算に関すること。
(2) 規約改正に関すること。
(3) 役員を選任に関すること。
(4) その他、特に重要な事項
2. 役員会は随時、会長が招集し、次の事項を協議する。
(1) 総会に関すること。
(2) 研究会の運営に関すること。
(3) その他、必要な事項。
- ◆第8条（会計年度）
本会の会計年度は1月1日から同年12月31日までとする。
- ◆第9条（会費）
会費は年3,000円とする。
- ◆付則
本規約は平成6年1月1日から施行する。
平成9年1月1日一部改正。
平成10年2月1日一部改正。
平成13年3月9日一部改正。

■北海道美術館学芸員研究協議会役員

顧問 笹野 尚明（芸術の森美術館・館長）
吉田 豪介（市立小樽美術館・館長）

会長 奥岡 茂雄（北海道立近代美術館・学芸副館長）
副会長 斎藤 傑（中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館・館長）
幹事長 鈴木 正實（北海道立近代美術館・学芸部長）
幹事 ※佐藤 友哉（ ” ” 学芸第一課長） 事業
柴 勤（北海道立函館美術館・学芸員） 事業
角井千代絵（釧路市立美術館・学芸員） 事業
※浅川 泰（北海道立近代美術館・学芸第二課長） 会計
水田 順子（ ” ” 主任学芸員） 会計
※吉崎 元章（芸術の森美術館・学芸普及係長） 会報
佐藤 幸宏（北海道立近代美術館・主任学芸員） 会報
苦名 真（北海道立三好好太郎美術館・主任学芸員） 会報
※は、事業、会計、会報のそれぞれのチーフ

監査 菅 訓章（神田日勝記念館館長代理）
星田 七重（市立小樽美術館学芸員）